

アメリカに浸透する仏教 — その現状と意義

ケネス・田中
翻訳：堀内俊郎

現状

現代アメリカ宗教の専門家であるハーバード大学のダイアナ・エック教授によれば、「仏教は今やアメリカの宗教である」。仏教が「アメリカの」宗教であると見られていることは、今日の合衆国における仏教の状況を反映している。

近年では、仏教徒の人数は、アメリカの人口の1~1.3パーセントを占めて350万人と、合衆国で3番目に大きな宗教となり、1960年以來、17倍も増加している。もちろん、はるかに多いのはキリスト教徒であり、人口の75パーセントがクリスチャンである。次いで多いのがユダヤ教徒であり、2パーセントがユダヤ教徒である。ヒンドゥー教といったような他の信仰は、それぞれ人口の1パーセント以下である。

350万人の仏教徒以外にも、仏教徒であるとは自称しないものの、仏教、特にその瞑想に大いに興味を持っている人々もいる。こういった人々は、同調者 (sympathizers)、あるいは幾分のユーモアをもって「ナイトスタンド・ブディスト (nightstand Buddhists、夜の電気スタンド仏教徒)」と呼ばれている。彼らはいかなる寺院やセンターのメンバーでもないかもしれないが、自宅の人目につかないところで瞑想し、仏教書を読むことによって、仏教を実践している。彼らはそれらを読む時に、しばしば書物を寝室の枕元のテーブル (ナイトスタンド) に置いており、それゆえにそう呼ばれている。ナイトスタンド・ブディストの数に関する信頼できるデータはないものの、数百万人と推定されている。

さらに、少し前の調査によれば、12パーセントの人が、宗教やスピリチュアリティを考える上で、仏教が重要な影響を与えたと回答している。これは2500万人にのぼるということである。ゆえに、これら3つのグループ (仏教徒、ナイトスタンド・ブディスト、仏教に大きく影響された人々) をすべて合計すると、アメリカにおいて3000万人を少し超えるぐらいの数となる。

成長の要因

アメリカ仏教の成長の要因として、4つの要素が考えられる。宗教の重要性、社会の開放性、ドラマの影響、そして、スピリチュアリティ (精神性) である。

宗教の重要性：アメリカは、他の先進国に比べて、宗教にはるかに高い価値を置いている。一般の人々は、概して、コミュニティで極めて重要な指導的役割をも果たす宗教の専門家を尊敬している。そして、多くの親たちは、協調して、子供たちに宗教的な教育を与えようと努力している。それは、宗教は子供たちに精神的・倫理的基礎を与える「ポジティブなもの」と見なされているからである。もし宗教が重要でなければ、仏教に興味を持つ人の数ははるかに少なかったであろう。

社会の開放性：アメリカ仏教の成長の第2の要因は、1960年代にプロテスタント以外の諸宗教に対する開放性がより大きくなったこととともに起こった、根本的な社会変動にある。例えば、カトリック教徒であったジョン・F・ケネディーが大統領に選ばれ、カトリック教会自体が、「第2バチカン公会議」の自由化プロセスを経験した。

そして、新移民法は、さらに多くの非西洋諸国からの人々の到着でもって、より大きな多様性を促進することを手伝った。

この大きな開放性の中で、仏教はもはや東洋の異教とは見られなくなった。実際、精神的な事柄に興味を持つ多くの人々は、アジアは物質主義的な西洋よりも優れていると考えるようになってきている。したがって、仏教の魅力は、産業化されてしまった西洋の精神的退廃により効果的に応えることができる、アジアの優れた宗教の一つであったという事実にある。

ダライラマの影響：成長の第3の要因は、たった一人の個人のポジティブなイメージにある。すなわち、ダライラマ14世、テンジンギャツォその人である。彼はノーベル平和賞受賞者として、そして亡命中のチベット指導者としてよく知られている。しかし、西洋において、彼の仏教推進者としてのインパクトは計り知れない。彼は、数多くのアメリカ訪問の間、話を聞くために集ってくる数千の人々から、深く愛され高く評価されている。ダライラマの人気は、彼が平和的で、寛容で、近づきやすい精神的指導者であると考えられているという事実に基づく。かくして彼はアメリカの宗教界に新しく新鮮な要素を促進することを手助けしている。

スピリチュアリティ（精神性）：第4の、そしておそらくもっとも重要な要因は、アメリカの宗教の本質の変化に関係している。人々は組織化された宗教よりもスピリチュアリティに、より魅惑されているのである。

「私は宗教的ではないが、スピリチュアル（spiritual）的である」という声が、多くの人から聞かれる。著名な宗教研究者であるウェイド・クラーク・ルーフ（Wade Clark Roof）は、スピリチュアリティを、「個人が求めるものに合った〔深遠な〕一人ひとりの体験」と定義し、さらに、連結性（connectedness）、一体性（unity）、平和（peace）、調和（harmony）、落ち着き（centeredness）という5つのキーワード的な単語によって、精神性を定義する。これは、伝統的な宗教を特徴付ける5つの用語である神、罪、信仰、懺悔、道徳とは異なる。

アメリカにおける仏教は、後よりも前の用語セット（＝連結性など）によって、より特徴づけられる。変化しつつある傾向に伴って、より一層そうになっている。個人の体験を強調するスピリチュアリティのこの魅力の一部として、仏教は以下の3つの分野で顕著に効果的であった。

第1は、老い、死、喪失といった人生における苦しみを扱う際に仏教がとる健全な態度である。仏教は、苦しみを、人生の本質的な部分であり、理解され、受け入れられ、より完全で意味のある人生を送るための跳躍台と転ずる必要があるものと見ている。

第2に、仏教は個人個人の人格の理解を重く評価する。それは、教えというものは、個人特有の体験に直接的に語りかけることができなくては、意味を持たないからである。これが、アメリカの仏教徒が、「我々の書物に書いてあるから、…もしくは師がそのように言ったからとそのまま信じるな」という有名な言葉を特に好む理由である。

スピリチュアリティの第3の分野は、人々がメディテーション（瞑想）に引きつけられることにある。これがおそらく、アメリカ仏教の成長の第一の理由であろう。多くの人々が、仏教の瞑想は実践が容易であり、心いやされるものであり、精神的に活力を与え解放的であると気がついている。特に、坐って行う瞑想が、禪、テーラヴァーダ、チベットの学派の主要な実践であり、もっとも多い数の改宗者を引きつけてきた。

意義

アメリカでの仏教のこのような成長は、二つの面で意義を持つ。1) 仏教にもたらされつつある変化、2) 特に先進国におけることであるが、伝統的宗教からスピリチュアリティへという、グローバルに起こっている転換である。このシンポジウムにより関係するので、第2のポイントを詳しく説明したい。だが、まず第1のポイントを簡単に論じておきたい。それは2600年に近い歴史を持つこの古代宗教にとって、いくつかの極めて興味深い「最初の出来事」を含んでいるからである。

一般的に、仏教は「東漸」し、アジアの多くを覆うようになった。とはいうものの、仏教は、西洋の国ではいかなる重要な方法でも、宗教として広まってこなかった。しかしながら、仏教は、20世紀の後半に、アメリカとヨーロッパにおいて、そのことを最初に達成した。今や、仏教が西洋へ伝播することを妨げてきた壁は崩れ去ったと宣言してよかろう。第2に、アジアにおける仏教の伝播は、中心的な文化から周辺的な文化へというものであ

た。インドからチベットや東南アジアへ、また、中国からベトナム、韓国、日本へというように。しかしながら、アメリカへの伝播はそのパターンから逸脱している。というのも、中国の政治的、経済的な成長にも関わらず、アメリカはなおも世界において最も中心的な国だからである。第3の点は、アジアの多くの国は、悟りの教説のためだけでなく、芸術的、技術的、政治的目的のために、仏教を受け入れたという事実に関係する。為政者たちは、自分の政治的な力を強化し、自分の社会の芸術的、建築的、技術的な質を高めるために、仏教のこれらの要素を求めた。これとは逆に、アメリカでは、為政者ではなく一般の人々が、仏教を、悟りや精神的な幸福というその本来の目的のために、求めているのである。

仏教史上におけるこれらの3つの最初の出来事は詳細に議論したいのだが、それは別の機会に譲るとして、第2のポイントに移りたい。つまり、アメリカにおける仏教の成長は、多くの人々の間での、伝統宗教からスピリチュアリティへという移行を意味しているという点である。しかし、この現象はアメリカに限ったことではなく、他の国々、特に西洋やアジアの先進国において見いだされることである。この点は日本も例外ではない。自分たちが教えを提示したり信奉者たちを扱ったりするやり方を再考するために伝統宗教に挑戦することは、近代にグローバルに見られる現象なのである。

前述のルーフ教授による「個人が求めるものに合った〔深遠な〕一人ひとりの体験」という定義に部分的に基づきつつ、私はスピリチュアリティを、「個々人による聖なるものの体験」と定義したい。この定義には3つの特徴がある。1) 個人、2) 体験、3) 聖なるもの、である。

3つの特徴のうちの最後のものを最初に取り上げると、「聖なるもの」は伝統的な諸宗教で探求されてきた聖なるものと重なるかもしれない。しかし、スピリチュアリティは、自然、音楽、ビジュアルアートといったような領域に由来する、非宗教的な、あるいは世俗的な意味での聖なるものを含むという点で、それらを越えている。さらに、スピリチュアリティにおける聖なるもののきわだった他の性質は、日常生活における「普通の」活動を強調することにあると見られる。聖なるものは、常態を越えた (extraordinary) ところのみならず、日常 (ordinary) の内にも発見されるのである。

集団とは反対の「個人」を強調することが、スピリチュアリティの別の特徴である。スピリチュアリティに興味を持つ人々は、伝統的な宗教の持つ外なる権威やその制度よりも、個々人の聖なるものの体験を、はるかに強調する。教会、ユダヤ教会、モスク、寺院は、それらそれぞれの、時の試練を経た伝統の聖性を表現している。しかし、多くの同時代の探求者たちは、その精神的な欲求が満たされていないことに気づいた。なぜならば彼らの伝統的な宗教は、その教説がより個人化され、あるいは個々のものになることなしには、有意義になり得ないのだから。

スピリチュアリティの第3の特徴は「体験」であり、そのことは、宗教団体によって述べられた教説や信条体系や教義を単に理性的に知るだけのこととは区別される。体験は、単に頭によってだけではなく、心や全存在でもって個人的に感得することを必要とする。そのことにより、探求者は、聖なるものを「具現化」し、個人の全人格でもって聖なるものを完全に感得することが可能となる。

スピリチュアリティは近代化の産物でありその最大の特徴は個人主義化にあると論じてきた学者たちに、私は賛同する。近代化は、人生の多くの場面において団体から個人への移行をもたらした。そして、グローバリゼーションはこの移行に貢献してきた。団体はそれほど頼りにならず持続しないという理由で、個人が団体をあまり強調しないことを推奨することによってである。たとえば、人はもはや会社に終身雇用をあてにできず、かくして、前の世代が会社に対して見せたような忠誠心を示すことができなくなっている。ゆえに、人は安定の主たる源泉として、自分自身に頼ることを強いられている。

個人に対してこのように焦点をあてることは、さらに、聖なるものを自己の内部に置くことへと導いた。先に述べた諸要素と結びついて、近代化とグローバリゼーションは明確な自己同一性の欠如へと導き、人々は自分が本当は何者なのかということあまり明瞭に知ることができなくなっている。今日とは異なり、伝統的な社会では、人は恒久的で明瞭に定義された役割を定められていた。今日では、人々の役割は明瞭には定義されておらず、極めて流動的である。結果、多くの人々は、自分たち自身の中にあると見られている真実の自己を探求している。この移行は、「主観的転回 (subjective turn)」として言及されており、近代化の一つの特徴である。

個人への移行と、それに伴う真実の自己の理解の必要は、先に述べた瞑想人気の一つの理由である。いくつかの推計によれば、アメリカでは、毎日2千万人にもものぼる人々が瞑想しており、その人気と必要性を裏付けている。瞑想は今や宗教の枠を越え、病院やセラピーオフィスといった場所で実践されている。そこでは瞑想はストレスや痛みを軽減し、免疫システムを高め、心理療法的な明瞭性を促進することに効果的であると考えられているのである。

しかしながら、スピリチュアリティの持つこれらの側面は、極端に「個人化」、「個人主義化」されたものだと見なされてきた。その自己中心的な特徴はコミュニティや分配を犠牲にすることになるといふほどのめかしをもつてである。たとえば、たしかにアメリカにおけるインサイト・メディテーション（Insight Meditation）の集団は、瞑想だけを選択し、儀礼やテラヴァーダ仏教伝統の教えを拒否する傾向にあった。その指導者のうちには、「過剰に」個人主義化された瞑想の特徴に心配の声を上げる者もいる。瞑想者には、より大きな精神的共同体とほとんど交流しない者もいるのである。

しかし、私はこの個人主義化されたスピリチュアリティの傾向は、ポジティブな発展であり、必ずしも精神的退廃の徴候ではないと見たい。聖なるものの個人的な体験は、シャカムニ仏陀が35歳の時に菩提樹下で体験した宗教のあり方に他ならない。近代の探求者で仏陀と同じようなレベルでの精神的達成をなした者はいないものの、近代の仏教瞑想者たちは仏教本来の目的から逸脱したのではないのである。

実際、これらの探求者たちの多くは、ナイトスタンド・ブディストという語が示しているように、多読であり、仏教の哲学的次元をよく把握している。なぜなら十分な教育を受け、収入は中流から中流の上層階級に属するものが多いからである。彼らは、伝統的宗教の教説はこのグローバル化された世界においては時代遅れで単純に過ぎると考え、それに満足しない傾向がある。彼らはつき従うための白か黒かの答えを求めているのではなく、宗教的、倫理的な問題について彼ら自身の決断をするために必要な基礎を与える精神的成熟を求めているのである。

さらに、宗教の多様性の発展に伴い、多くの人々は、多様な宗教の伝統が共存するために健康的で協調的な道を与えることができるスピリチュアリティの形を求めている。世界はもはや諸宗教に宗教的不寛容、排他主義、孤立を与える余裕はない。自分が唯一の真実の宗教であり唯一の真理であるとする宗教が存在する余地は、より少なくなっている。世界平和には多元的な開放性の態度が必要である。著名なキリスト教神学者のハンス・クニング博士が宗教間対話に関連して述べているように、「宗教間の平和なしには世界平和はあり得ない。そして、対話なしには宗教間の平和はあり得ない」。そして、多くの人々は、仏教こそが、さらなる対話を促進できる伝統であることを見いだしている。

アメリカにおける仏教は、「自分自身のために考えること」や個人的体験に価値を置き大事にする人々にとって、魅力的である。これらの理由で、仏教は着実に成長しつづけ、それによって、続く数十年のうちにはアメリカにおける第2に大きな宗教であるユダヤ教をも越えることを可能とするであろうというのが私の見方である。この意味で、我々は、誰であろうアルバート・アインシュタインによる予言的な見方の実現を目撃しているのである。彼は、宗教の3つの段階について述べた。1) 畏れの宗教（religion of fear）、2) 道徳の宗教（moral religion）、3) 広大無辺の宗教（cosmic religion）である。彼は、20世紀以降には、科学の発展に伴い、人類は「有意義な一体として自然と精神を調和させる」ものである広大無辺の宗教を欲するであろうと感じていた。そして、彼は仏教を代表的な広大無辺の宗教と考えたのである！